

広告 企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



今回のプロジェクトで取り組んだプロダクト「おぼろ練り込み」



プロダクトの説明をする水野さん



水野 智路  
練り込み陶芸作家

愛知県瀬戸市で練り込み技法を用い2008年から作陶。瀬戸市で開催された「平成の招き猫100人展」「陶のあかり路」「瀬戸・藤四郎トリエンナーレ」出展や「ドームやきものワールド」6回出展などをはじめ、全国各地の百貨店などでも個展やグループ展を開催し、練り込み実演を行う。また老人健康保険施設や、障害児のデイサービス施設、知的障害者施設で陶芸講師としても活動している。

### 瀬戸の土だからこそできる器を目指して

今回は、愛知県瀬戸市で練り込み技法で作陶を行う水野さんが挑戦したのは、瀬戸市で採れる磁器土を使用して器を作る「おぼろ練り込み」。練り込み技法

## 瀬戸の磁器土と練り込み技法から生まれる、模様が透ける器

水野 智路 愛知県瀬戸市で練り込み陶芸作家



商談ブースでは練り込み技法の説明も

で、同じ練り込み土から作っても同じ作品はできない。模様の場合や器の形によって柄の見え方も変わる。ひとつひとつ模様の出方が違うのが練り込み技法の魅力という水野さん。プロジェクトではこの技法を生か

し、瀬戸の良質な磁器土を二種類使った器とフリーカップを制作。透過性のある磁器土も使用することで、自然光や電気の明かりに照らされると、一見白く見える器に花柄や伝統の柄が浮かび上がる。

陶器は普段から作っているが、本格的に磁器を作るのは今回が初めて。完成までの工程では多くの問題にぶち当たった。

「透過性のあるものがないので、削り出しや焼き上げの工程、何もかも違った。何度やっ



完成品はバイヤーからの注目も集めた

開店当初、商品は手ぬぐいや地下足袋だけだったが、お客さんの要望を取り入れ、がま口やカードケースなど気軽に使える商品や次々と制作。「まり木綿」のモットーは「伝統は見るものではなく、日常で使い、楽しむもの」。柔軟な発想で、有松鳴海絞りの可能性を追求しようとしている。



プロダクトの説明をする伊藤さん

学繊維でも色落ちしないよう撥水加工を施した「レインコート」を思い立つ。しかし、生地つもの壁にぶつかって。「繊維の奥まで染料が入らず、柄が表面にはっきりと出てこない。染めムラやシワもある。まだまだ試作が必要だと思った。

### 新素材で絞り染めのレインコートを



完成プロダクト「絞り染めレインコート「haneru」」

なる。そして2017年、自身のブランド「マリ木綿」を立ち上げ、有松にお店を開店させた。

その伝統の世界に新風を吹き込んでいくのが、伊藤さんと村口実梨さんのユニット「まり木綿」。名古屋芸術大学の同級生だった二人は学校の授業で有松鳴海絞りと出会い、その魅力に引き込まれる。「藍もいろいろ、カワフルでポップな絞り染めがあったらいい」。次第に二人は、伝統を重んじながらも、独自の染め物を生み出すように

「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイナー関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたけ足がかり、ビジネス拡大の

## 新しい発想やアイデア、出会いに刺激を受けて



「まり木綿」の伊藤さんと村口さん

約一年間 プロジェクトに参加した感想を聞くと、「普段は客観的な意見を聞く機会が少ない。今回さまざまな分野で活躍されているサポートメンバーの意見をいただき、自分たちでは思いつかなかったようなアイデアが次々出てきたのが刺激的だった。新聞社に取り込まれた作品があるなど貴重な出会いもあったという。「この出会いは、必ず次へつながっていった」と意欲を燃やす伊藤さん。

伊藤さんにとって参加は大きな転機となり、今まで以上に強くなった想いは、「有松鳴海絞りだから買おう」ではなく、「この商品、ステキな」と買ってくれたものがまたま染められた。理想、魅力的なモノを作り続けて、有松鳴海絞りをもっと盛り上げていきたい。それは、「まり木綿」の大きな夢でもあると瞳を輝かせて

伊藤さんにとって参加は大きな転機となり、今まで以上に強くなった想いは、「有松鳴海絞りだから買おう」ではなく、「この商品、ステキな」と買ってくれたものがまたま染められた。理想、魅力的なモノを作り続けて、有松鳴海絞りをもっと盛り上げていきたい。それは、「まり木綿」の大きな夢でもあると瞳を輝かせて



生地を織り込んだ後に染め、柄を作る



まり木綿が活動する有松の風景

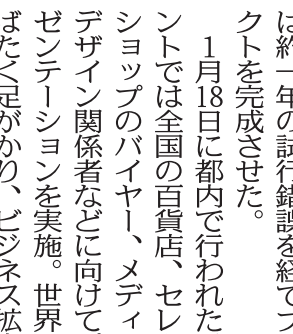


## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月18日、プレゼンテーションにて

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家/東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



伊藤木綿愛知県有松鳴海絞りクリエイター・コンサルティンクは生駒氏と



水野智路さん春のエリア・コンサルティンクは下川氏と



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

地域の特性をプロダクトに 52名の匠が「世界」へ発信

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

きっかけとなるチャンスを手にした。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出すことしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。愛知県瀬戸市、有松鳴海絞りのクリエイター・伊藤木綿さんと練り込み陶芸作家、水野智路さんそれぞれ思いと、完成したプロダクトを紹介する。

## 作品を通じて瀬戸の魅力伝えたい



透過性のある土を使い制作に取り組む

「心で感じる器を作り、作品を通して、瀬戸をアピールしていきたい」。作品や活動を通して地域を活性化していきたいと強く意識するようになった。現



水野さんが活動する瀬戸の風景

今回のプロジェクトではサポートメンバーからさまざまな意見をもらったが、印象的だったのは「自分が作りたいものをしっかりと作る」ことが大切、という言葉。「祖父も父も陶芸家だったので、小さい頃からモノづくりに触れてきた。この機会に自分が本当に作りたいものは何かを改めて考えることができた」と語る。そしてプロジェクトを通じて、新たな目標を見つけた。「瀬戸の良質な磁器土だから、小さい頃からモノづくりに触れてきた。この機会に自分が本当に作りたいものは何かを改めて考えることができた」と語る。そしてプロジェクトを通じて、新たな目標を見つけた。「瀬戸の良質な磁器土だから、小さい頃からモノづくりに触れてきた。この機会に自分が本当に作りたいものは何かを改めて考えることができた」と語る。そしてプロジェクトを通じて、新たな目標を見つけた。

また、スーパーバイザーの小山氏からは、練り込み技法という作品の特性を活かし、結婚式の引き出物や出産祝いなど、限定品のギフトとしてアピールしてはどうかとアドバイスを受け、作るだけでなく、作品の良さを伝えていくことも大切な仕事なのだと感じた。新たな視点は今後プロダクトを展開していく上で大きな原動力につながる、と話す水野さん。

最後に器を使う人たちに伝えたいことは、「光の加減でいろいろな表情を見せるので、ひとつの器でいろいろな雰囲気を楽しめる。器を通して、多様な人の会話が広がり、多くの人に瀬戸に興味をもってもらいたい」。今後は自分が本当に作りたいものを、楽しみながら作っていきたいと語る。日本だけでなく、外国の人にも瀬戸のよさを伝えていきたい。水野さんの夢は大きく広がっている。